第３　問題作成部会の見解

１　出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

○　高大接続改革の中で，高等学校学習指導要領の趣旨を踏まえ，各大学の個別選抜や総合型選抜等を含む大学入学者選抜全体において，「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」の総合的な英語力を評価することが求められている。共通テスト「外国語（英語）」は，「リーディング」形式と「リスニング」形式の問題を通して，文字や音声による試験の特徴を生かしながら，以下のように可能な限り総合的な英語力を評価する。

・コミュニケーションを行う目的や場面，状況などに応じて，情報や考えなどの概要や要点，詳細，話し手や書き手の意図などを的確に理解する力を引き続き重視する。

・併せて，高等学校において，英語を「聞くこと」・「読むこと」・「話すこと［やり取り］，［発表］」・「書くこと」を統合した言語活動の充実が図られることを踏まえ，情報や自分の考えを適切に表現したり伝え合ったりするために，理解した情報や考えを整理したり，何をどのように取り上げるかなどを判断したりする力を重視する。

・また，コミュニケーションを支える基盤となる音声や語彙，表現，文法等に関する知識や技能についても，上記の力を問うことを通して引き続き評価する。

○　「リーディング」，「リスニング」ともに，共通テストの問題のレベルは，出題範囲としている科目（「英語コミュニケーションⅠ」，「英語コミュニケーションⅡ」及び「論理・表現Ⅰ」）の目標及び内容（言語活動の例，言語の使用場面や働きの例など）等に対応したものとする。その際，多様な入学志願者の学力を適切に識別できるよう，引き続き，CEFR の概ね A1～B1 レベルを目安として問題のテクスト，使用する語彙，タスクなどを設定し，問題を作成することとする。

○　「リーディング」の表記については，現在国際的に広く使用されているアメリカ英語に加えて，場面設定によってイギリス英語を使用することもある。

○　「リスニング」の音声については，多様な話者による現代の標準的な英語を使用する。また，読み上げ回数については，１回読みと２回読みの両方の問題を含む構成で実施することとする。

２　各問題の出題意図と解答結果

・　第１問は，英語の特徴やきまりに関する知識・技能（特に文構造及び文法事項）に基づき，身の回りの事柄に関して平易な英語で話される短い発話を聞いて，必要な情報や，発話内容の概要や要点を把握する力を問う。日常的な内容の文を聞いて，内容が合っている選択肢（セクションＡでは文，セクションＢではイラスト）を選ぶ問題である。音声は２度流れる。

　第１問の正答率はおおむね狙いどおりで，全体的に識別力もあったが，問１と問２の正答率が低かった。特に問２の正答率が低かったのは，発話で用いられた“afraid”が，誤答である❷に含まれていたことが理由として考えられる。

・　第２問は，身の回りの事柄に関して平易な英語で話される短い対話を，場面の情報とイラストを参考にしながら聞き取ることを通じて，必要な情報を把握する力を問う。日常的な短い対話を聞いて，設問に対する答えをイラストから選ぶ問題である。音声は２度流れる。

　第２問の正答率は，例年に比べて低かった。たとえば問９では“out of the sun”という表現が「日陰」にいることと結び付きづらかったと考えられる。一方で，文脈が与えられ，対話の中で必要な情報が順次分散された形で提示され，また選択肢が絵であることと音声が２度流れることなどから，比較的正答率が高い小問も見られる。問 10 の正答率は高かったが，これは“virtual

reality”という表現が聞き取れれば正答にたどり着けたからだと考えられる。

・ 第３問は，身の回りの事柄に関して平易な英語で話される短い対話を，場面の情報を参考にしながら聞き取ることを通じて，概要や要点を目的に応じて把握する力を問う。日常的な対話を聞いて，対話内容に関する設問の答えとなる選択肢を選ぶ問題である。対話は言語の機能（例：確認，依頼等）を軸に作られており，小問６題のうち，今回は問 13 と問 16 をイギリス英語による発音とした。また，この大問から音声は１度しか流れない。

第３問全体の正答率は，おおむね適切な範囲であった。特に問 13 と問 16 は識別力が高く，良問であったと言えよう。問 16 はイントネーションを含め会話の全体的な流れを正確に聞き取る必要があり，成績上位層を識別していた。逆に問 17 は後半のみの理解で正解にたどり着けるため，成績下位層にとっても容易であったと考えられる。

・ 第４問Ａは，必要な情報を聞き取り，図表を完成させたり，分類や並べ替えをしたりすることを通じて，話し手の意図を把握する力を問う。また，第１問の文（２回読み）・第２問の対話（２回読み）・第３問の対話（１回読み）から，長めのモノローグに移行する設問としてのつなぎの役割を果たしている。

問 18～21 は，目的地までの行き方に関する話を聞いて，取るべき行動を示す絵を選び行う順番に並べる問題であった。与えられた選択肢には不要な絵が１つ含まれており，さらに得点を得るには全問正解する必要があった。バスの乗車位置が前か後ろかということには地域差があることなどが正答率に影響したのかもしれない。

問 22～25 は，キャリアフェアでの説明を聞いて，表を完成させる問題であった。得点は各問いに付与されるため正答率はおおむね高かったが，いずれの問いも識別力を示した点は評価できよう。

第４問Ｂは，複数の情報を聞き，最も条件に合う選択肢を１つ選ぶことを通じて，状況・条件に基づき比較して判断する力を問う。四人の話者は，アメリカ英語，イギリス英語，日本語など，異なる母語の話者であった。

自習する場所を決めるために，四人のクラスメイトによる異なる場所についての話を聞き，考えている条件に最も合う場所を決めるというものであった。今回は，全ての条件に直接触れていない選択肢もあったが，正答率は高く，この種の問題に関しては受験者の対策が整っているように感じられる。

・ 第５問は，身近な話題や知識のある社会的な話題に関する講義を聞き，①メモを取ることを通じて概要や要点を捉える力，②聞き取った情報を他者と共有したり，話し合ったりする力，③聞き取った情報と問題文中に示されたグラフ資料を統合的に処理する力を問う。

トピックは養殖のための新しい水で，その水の構成，並びにその使用がもたらす経済効果や再利用による利点に関する講義を聞く形式であった。難易度が高い大問で，特に問 28～29 と問 32 の正答率が低かった。問 28～29 は完答問題であるが，問 29 で“great financial rewards”が正答選択肢“profitable”と結び付けづらかったこと，またワークシートにある“worldwide”から誤答である“widespread”に引っ張られてしまったことが理由として考えられる。問 32 では“aren’t”が聞き取れないと正答にたどり着けなかったため，正答率が低かった。問 27 と問 33 は正答率，識別力とも想定された範囲であった。

・ 第６問Ａは，身近な話題やなじみのある社会的な話題に関する会話や議論を聞き，話者の発話の要点を選ぶことを通じて，必要な情報を把握する力や，それらの情報を統合して要点を整理し，判断する力を問う。

今回はフランス語の授業形態について話し合う二人の会話を聞き，会話の趣旨を判断させた。

問 34 の正答率は標準的な範囲にあり，識別力も高かったが，問 35 では会話の最後にある“as well”を聞き逃してしまうと正答にたどり着けないため正答率が低かった。

第６問Ｂは，身近な話題やなじみのある社会的な話題に関する会話や議論を聞き，それぞれの話者の立場を理解し，さらに特定の話者の意見を支持する図表データを選ぶことを通じて，必要な情報を把握・統合し判断する力を問う。

イヤホンとヘッドホンの使用と音量について議論する三人の意見を聞き，話者の立場を判断させた。昨年と同様に，話者の人数は三人とした。また，これまでと同様，男女の声の違い，異なる種類の英語，話者が互いの名前を呼び合うことにより，登場人物が区別できるようにした。

問 37 は一人の話者の発言の根拠となるグラフを選択するものであったが，正答率，識別力共に狙いどおりであった。

３　自己評価及び出題に対する反響・意見等についての見解

今回の共通テストは，平成 30 年告示の学習指導要領に基づく教育課程の下で実施される２回目の試験であった。前年度の 1 回目において第５問が大きく見直されたが，２回目であることから受験者は新しい形式に慣れてきたと思われる。全体的な構成・内容について，高等学校教科担当教員からは，知識・技能を問う問題だけでなく「思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる内容がバランス良く出題されて」おり，さらに学習指導要領に掲げられている目標を踏まえながら「実際のコミュニケーションの文脈が十分に意識された発話と設問の工夫が，各大問で見られた」との評価を受けた。教育研究団体からも「日常生活や学校生活に即した場面を扱い，聞き取った情報を整理・判断し活用する力を問う出題がなされており，技能統合的な英語力の評価として意義のあるものであった」との講評を頂いた。

今後も，多様な英語の音声を用い，思考力・判断力・表現力等を必要とする，話者の意図，含意と文脈，内容理解を問うような問題，受験者が既存の知識や体験を集結させながら解く問題，身近な暮らしや社会に関わる題材で，日常生活で用いられる自然な英語を体現した問題の作成を続けていきたい。

一方で，出題に関して懸念される点も幾つか指摘を受けた。以下に主なものとそれに対する問題作成部会としての見解を述べる。

・　第１問Ａでは，高等学校教科担当教員から「昨年度の本試験と比べると，扱われる語彙・表現がやや難化した設問が冒頭に配置された」との指摘を受けた。問１と問２において正答率が低かったため，試験冒頭で戸惑ってしまった受験者がいた可能性があり，この点は今後の検討課題の一つであろう。

・　第４問Ａに関して，教育研究団体から「『ある学校までの行き方』について，というよりは『それぞれのバスの利用方法』が問われたため，受験者が何を聞き取るべきかの焦点がずれたことも考えられる」との指摘があり，指示文と音声とのずれの可能性が示唆された。場面設定は受験者に聞く準備をさせる上で重要な情報源であるため，さらに慎重な検討をしていきたい。

４　まとめ

本テストの平均点は 54.65 点であり，前年度と比べて 6.66 点低くなった。一方，共通テストの出題形式に受験者が慣れてきたこと，受験者が４技能の学習を強化していること，小学校からの英語学習経験によりリスニング力が全体的に向上していることなどを考慮すると，平均点の上昇に歯止めが効かなくなる可能性がある。引き続き，適切な識別力を持つテストとしての問題作成に努めて参りたい。

一方で，教育研究団体からは，「難易度調整に当たっては，情報量の増加ではなく，語彙や話題の抽象度，発話速度などを工夫することで，『聞く力』を適切に測ることが望ましい」という重要な指摘を受けた。難易度の調整に留意しつつ，認知的負荷の増加が識別力の低下をもたらさないよう努めたい。

高等学校教科担当教員によると，「本テストの問題内容を踏まえると，高等学校等における今後の英語指導は，思考力・判断力・表現力等の向上を目指した授業改善をより一層推進することが期待される」とあり，共通テストの高等学校の授業への波及効果が大きいことは明らかである。高等学校において，「英語で発話された情報を聞き取り，単に理解するだけではなく，目的や場面，状況などに応じて，他者の意見に配慮しながら自分自身の意見や主張などを理由や根拠とともに伝え合うような学習を積極的に行うなど，豊かなコミュニケーション活動の中で，主体的・対話的で深い学びを実現する指導を充実させたい」という高等学校教科担当教員の見解は，問題作成部会も共有するところである。

本テストは，４技能のバランスを意識し，場面設定などを日本語で表記することで，測る力を「聞く力」に集約しており，また様々なコミュニケーションの場面や状況を設定し，学習指導要領の方針を汲んだものとしている。英語の多様化についても一定程度体現化できたと考える。問題作成部会としては，こうした方向性については今後も継続しつつ，適切な負荷設定と継続的な改善に努めて参りたい。